

「みこころにかなった事」－マタイによる福音書講解説教 53－

詩篇 第25篇1節～5節
マタイによる福音書 第11章 20節～27節

説教 岡村 恒 牧師

「父よ、これはまことにみこころにかなった事でした。」(26節)主イエス・キリストが大きな声を上げて神に祈りを捧げられた言葉です。

主イエスはこの祈りの前に、ガリラヤ地方のいくつかの町の名を挙げて責めはじめられました。主イエスの言葉に聞き従わない町が責められ、さばかれることが神のみこころだと言うのでしょうか？

ここに登場する町々は、いずれも主イエスや多くの弟子たちの地元、ガリラヤ地方にありました。ガリラヤ湖ほとりの中心地カペナウムやベツサイダ、少し北のコラジンに主はしばしば滞在して、神の国の福音を宣べ伝え、大勢の病人を癒し、悪霊につかれているとしか思うことができなかつた人々を解放しました。「山上の説教」(マタイによる福音書 4章～7章)を主イエスがお語りになった山も、ガリラヤ湖畔にあったと言われています。この地方を主イエスは「残らず巡回し…しるしと説教を」(9章35節)行われました。

主イエスはこの日、お怒りになったのでしょうか。人々は、主イエスに自分勝手な期待をして、ただ奇跡の恩恵を受けたいと集まってきていたのでしょうか。主イエスはしかしこの人々を前にして、口を開いて、「天地の主なる父よ。あなたをほめたたえます。」(25節)と感謝をお捧げになりました。この場所で、人々の不信仰のただ中で、なお、神をほめたたえずにはいられなかったのです。

ガリラヤの人々も、今ここにいる私たちも、目で見、手で触れることができるものに囚われて生きています。主イエスのお言葉を聞いても、天に心を向けることがなかなかできないのです。ユダヤ人は、神に与えられた具体的な律法を守ることで、神に喜ばれ、神の祝福を受けて生きることができると考えました。こういう人々に向かって「わざわざ」と言われた主イエスは、「山上の説教」で「さいわいだ」と叫ぶようにして神の祝福をお語りなつたお方です。目に見えるもの、手に握りしめることができるようなものは皆過ぎ去ります。地上の旅を終えて眠りにつく時に、何一つ私たちは持つて行くことはできません。全てを手放して、神の前に立つこととなります。主イエスは、その時にもなお取り去られることのない命を与える、と約束して下さいました。

ツロヤシドンという地中海沿岸の町は、貿易や軍事上の拠点で、多くの人々が集まり、様々な偶像が拝まれていた町、まことの神を知らない人々の町でした。かつて神に滅ぼされたソドムも悪徳と廃退の町だったと言われます。主イエスは、ガリラヤの町々が、これらの滅ぶべき町よりもさらに厳しく神のさばきを受けると言われました。

世の終わり、さばきの日には、神が用意して下さいた新しい天と新しい地とが下ってきます。その時、私たちは神の前に立つこととなります。そこでは、一人一人と神との関係が問われることとなります。罪を赦された者はその日、神に受け入れられ、「わたしの子よ」と呼ばれて天の食卓に招き入れられることとなります。神を神として拝まず、神を自分の命と人生の「主(あるじ)」として受け入れない者は、神との親しい関係を失った「罪人」だと言われます。しかし神は、主イエスを地上に送って、私たち罪人を招いて罪の赦しを与え、神の子として下さる救いの約束を実現して下さいました。

主イエスの周りに、神を信じ、主イエスを信じる者たちが集められていました。また、これから世界中で、主イエスを信じる者の礼拝が行われることを既にご覧になっています。だからこそ、神をほめたたえずにはいられなかったのです。しかも神は、この救いの約束を、「知恵のある者や賢い者に隠して、幼な子にあらわして下さいました。」(25節)父や母に全幅の信頼を寄せてその腕の中に全体重をかけて飛び込んで行く幼な子のように、神に信頼して全身全霊をかけて神の約束にすがりつく者を、神は招き、待っていて下さるのです。こどもは、自分が受けとめられることを全く疑わないで、広げられた腕の中に飛び込んでいくのです。

私たちが思い違いをして、自分自身の知恵や賢さ、熱心さによって歩もうとする時、主イエスは私たちを招いて下さいます。ご自身の命をもって私たちがあがない取って下さつたお方が、私たちの救い主です。私たちの周りに、神の約束に身を委ねて歩んでいる人々が大勢います。私たち一人一人も同じように、主イエスを信じて歩み出したら良いのです。そうして一人また一人と救いに入れられ、歩み始めることは、確かに主のみこころにかなつたことです。

(記 岡村 恒)